あるから、それを說いて、いよ〳〵本書の終りとしよう。

吾が月夜觀　元來人の感情は、その日その日の人間社會の出來に照應して變移するばかりでなく、天氣とか氣候とかにも著るしい影響をうけてゐることは、ちよつと氣をつけたら誰にでもすぐわかるだらう。それだから同じ月夜の感想といつても、春から夏へかけての暖かい夜の霧圍氣に浸たりながら眺める月と、秋、冬の冷たい風に吹かれながら、賞でる月とは、天上の月そのものにかはりはないが、こちらの氣分には大した徑庭のあることは否まれない。

室の中にたれこめてゐても、兎角又しても襲ひ來る衝動にたへかねて、何物かの形のない腕によつて、外へ押し出された春の夜のそゞろ歩きは、さして霧圍氣がつめたくもなく、何となくうら悲しいとも思はれない。些々たる言葉のいひちがへや、行爲の氣儘をも咎めない、よく人の心の中を諒解してくれさう

なうら若い女の友だちの幾人かとうちつれて、笑ひさゞめきながら、あの春の夜の不得要領な空に、うた〳〵ねしてゐる滿月、もしくはその前後の夜のもどかしさを觀賞しあふのは何物にもかへがたい逸樂であらねばならぬ。

山にも野原にも隙間もなく漲つてゐる春の夜の澱んだ霧圍氣をすうと、ふたつの鼻の孔に吸ひこむと、櫻の花や草花から逃げ出して來た匂ひが、仄かな甘さを感せしめる。そこらあたり、花だらけの野原を、ぶらつき歩いて來たらしい夜のあたりとも知れぬ、そよ風は、次第々々に人の心を痲痺させて來る。

連れ立つた女友だちのやはり同じ魔醉におちいりさうな目付きは、いよ〳〵こちらの狀態を促進させる効能がある。ほら〳〵とほつれた黑い鬢の髮のけが白い横顏に際立つて線を引いている。少し饐えか〻つたやうな髮の匂ひと、少しむれたやうな肌の匂ひとが、女らの足を運ぶたんびに流れ出して、我が心を

責めさいなむので、こちらは一層せつぱつまつて眼がくらみさうになつて來る。月光のまだるさ、風のねるさ、女の匂ひのなまめかしさ、これで何處からか笙の遠音でもひゞけば、色聲香觸の世界が歩調そろへてわが心の中に示現するのだが……。

夏の月は少々春の月をあたゝかくしたゞけだ。

秋の月こそ又なく哀れを感ぜしめる。樗牛のいふ月夜は秋のそれらしい。樗牛は月光が青い〳〵どしきりに青がつたが、春の月におぼろの面紗をかぶせたら、月の光が茶がかつてしまつて、青の感覺が消え失せるものだ。しかし秋の十分冴え切つた月光こそは、まことに青くすごく、唯あの世のとほしびの移りてらしてゐるかと思はれるほどの寂寞感が胸にひた〳〵とうらがなしい。晝間の汗んだ肌も、この秋の夜のつめたい風にさらされては、忽ち爽快かぎりなき

感を催ほし、家の椽端ちかく座を占めて、あゝ何としたこのさえ方だらうと、つく〴〵感歎の詞をもらすのは、又なき風流事である。古今の吟詠を口ずさみ、ありし昔のくさ〴〵の傳説を想起し、天地は無窮との感を促運するには、まことにふさはしい季節の夜である。

冬の月も、亦秋に似てその冷たさが一層つのつたのみだ。

何といつても、望月か又はその前後の夜の月夜でなければ、本當の心からの感銘はしみ出して來ないものだ。かの宵の間に東の間のほのめきを見せる眉毛のやうな三日月、それが木の枝に隱見するのも、ちよつと風情があるが、それはちよつとだけで、大して根柢のふかい感銘をひき起さしめるだけの力に乏しい。夜ふけて後、やつと東にあわてゝ上つてくる下弦すぎての弓形の月、光りが弱々しいので、闇の夜の木の下かげまで明るくさせる力がない。

そこはどうしても、夜もすがら、幾千の星のきらめきを、あちらに掃ひのけて、さつと銀の簾のたれ下つたやうに、いみじき光明をはなつ大形の月にしくものは決してないだらう。それが不幸にして雨の夜だつてかまはない。そぼそぼと降る雨夜の路が、どうしてこんなに見えるのか、まさか自分の知らぬまに眼が、猫の眼ととりかへられたわけでもあるまいにと、いぶかつたら、明るいも道理、今夜は十五夜ではないかと氣のついた經驗がなんべんとあつた。

附記。尙月そのものゝ研究に興味を見出された人は、どうしても天文の全般に渉つてその梗概を知つておかないと駄目である。この目的のために拙者「天文界之智囊」を一讀されたい。尙進んで地球や月や、又太陽の過去、現在將來、さてはこの全宇宙の成り行き等を大觀したいと思はれたら拙者「宇宙の構造」を繙かれんことを希望する。

大正十二年五月廿一日印刷
大正十二年六月三日發行

□月夜に憧れて□

定價 一圓五十錢

著者 古川龍城

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者 福永文之助

東京市京橋區木挽町一丁目十四番地
印刷者 工藤正雄

發兌 東京京橋尾張町
振替東京五五三 警醒社書店

吉田源次郎著

肉眼に見える「星の研究」

星圖四十七面
四六版百四十頁

望遠鏡がなくては星の研究は出來ぬと考へるのは近代人の誤です。三三百年以前の天文學は、立派に肉眼によつて完成されたのである。肉眼に見える星は六千からあり、遊星、恒星、彗星、變光星、その種類に於て必ずしも單調なものではない。本書は天文趣味を民衆生活に近づけるための努力であつて、一つ〳〵肉眼に見える星座の圖を挿入し、星々にまつはる優麗な、古人の心に湧いた傳說を記載してあります。恐らく邦文書中で、素人の天體觀測の指導書として、本書程完成したものはありますまい。

（定價三圓五十錢　送料十八錢）

水野千里著

國定教科書材「星の話解說」

昨年四月から小學國語讀本九卷に星の話が現れたことは、心ある士の最も愉快とするところである。本書は教師の參好として天文學の大體と、獨に讀本中にある大熊座、小熊座に就て辭說したものである。

定價五十錢　送料四錢）

水野千里著

「太陽の親めぐり」

童話體を以て、地球を出發點として、太陽系の星々を、興味深く兒童のために說いたものである。その他ハーシエルの傳もあれば天文臺の話もある。第二の國民の科學知識の基本として、天文趣味を與へることは、最も有意義なことではないか。

（定價一圓二十錢　送料八錢）

宇宙建築と其居住者

帝大助教授 理學士 山本一清著

人は天に憧れる、人間文化の起る處、必ず天文學がある。全天に並ぶ星の瞬きに、二つの瞳を放つて天の組立を考へた四千年の昔から、望遠鏡、分光器に依つて宇宙の構造を探ぐる現代まで、學の歷史とそれに織り込まれた人間の理想主義精神を讀むことは、現代人が汝自身を知る最良の道である。

本書はその理想主義の流れを辿つて、哲學の母體を叩き、近代科學の源泉に汲みつゝ、人間全體の思想史としての天文學を歷史的系統的叙述してみる。

星圖凸版　三十六葉　定價一圓六十錢　送料書留十五錢

「天文と人生」

山本一清著

原始時代に天體宗教が起り、西洋音樂が天文學から發し、希臘哲學の起原が埃及のそれを根據としてあることを知る人は、天文と人生が如何に密接な關係を持つかを知り得やう。天動說、地動說、天體運動論、銀河宇宙論等、天文學說の歷史的展望に據り、宇宙觀變遷の跡を窺ひ、更にアインシタインの新說其他最近の天文學說が吾人に如何なる宇宙觀を與へるかを知らんとする人は本書に就かねばならぬ。（定價二圓二十錢　送料十五錢）

「アインシタインの相對原理」

山本一清著

十七世紀以來、學界の宿題となり來つた光線、エーテルの問題と、之に對する各時代のよアインシタインの人とその原理、而も特別一般の兩方に亘つて數學抜きに、例證巧みに說き、最後に餘論として、相對原理の哲學的意義迄說き及んでゐる。

（定價五十錢　送料四錢）

星空の觀察

帝大助教授
理學士　山本一清著

四六版三百餘頁
星圖其他十七葉
定價二圓五十錢
送料書留十五錢

詩聖ダンテは星空を仰いで九重の天を胸に宿し、遂に美しき神曲天堂篇を描き、大哲プラトーンさへ、『彼こそはイデアそのものだ』と星の美しさを讃へてゐます。

只仰ぎさへすればいゝ、敢て專門家のみでなく、婦人にも子供にも、晴れた夜でありさへすれば、六千個の星々が、――遊星、恒星彗星、變光星、流星――それぞれの輝きと運行によつて、不思議な世界を展開してくれるそこから妙なる樂の音を聽かうが、奇しき物語を生み出さうが、それは見る人の心次第です。古人はそこにに七夕物語や蛇遣座の話やオリオンのはかない戀物語を生みました。

如何に心のすさんだ時でも、星の輝きを仰ぐことに依つて、誰でも眞摯と人間味とを取戻します。人間に惠まれた最も高尚な道樂として、星空の美を味はへ！。

「星座の親しみ」

山本一清著

素人天文家の最も親しみ多い著作である。昨夏以來忽ち十七版を賣盡した書、京大に天文學講座を擔任してゐる著者が、或る夜星の觀測中ふと興が湧いて筆をとり、夜を徹して書き上げた書だ。行文詩の如く美しく、春夏秋冬の空の變化を描いてある。星座の趣味養成のためには何人も第一に手にせねばならぬ著作である。

（定價一圓　送料八錢）

「遊星ごりぐ」

山本一清著

數千年前の古代人も、今日の人も天を仰ぐ人々にとつて、興味の中心となつたのは、大陽系中に於ける遊星の運行である。その輝きや運行が餘りに突飛であるために、往々奇想天外の驚きを起きせる。それたけ星を見る人にとつて、遊星程面白いものはない。本書中には、火星、水星、木星、土星、地球等に就て特殊の說明を試みてあります故、遊星に就て知らうとする人は先づ本書に探らねばなりませぬ。

（定價二圓　送料十五錢）

385
265

終